現代日本の建築家の連作に関する設計論にみられる
建築表現を展開させる思考CONTINUOUS THOUGHTS OF ARCHITECTURAL EXPRESSION
IN DESIGN THEORIES ON “A SERIES OF WORKS” BY CONTEMPORARY JAPANESE ARCHITECTS

大嶽 陽 徳*, 安 藤 一 将**, 奥 山 信 一***

Akinori OTAKE, Kazumasa ANDO and Shin-ichi OKUYAMA

This report aims to illustrate continuous thoughts of architectural expression by contemporary Japanese architects through investigating design theories on a series of works by one architect on the same design theme. Firstly several descriptions of the theme were analyzed. Secondly continuous thoughts of architectural expression were analyzed from a viewpoint of two aspects ; one is the similarity among each work's architectural expression, the other is the way of setting the prototype model of the architectural expression in the process of executing works. Consequently, the relationship between design theme and above two aspects was considered.

Keywords : continuous thoughts of architectural expression, a series of works, time, design theory, contemporary Japanese architects, KJ method

建築表現の展開, 連作, 時間, 設計論, 現代日本の建築家, KJ 法

1. 序

1.1. 研究の背景と目的、意義

建築の設計者の多くは、建築作品の創作において、実体としての建築を具現化する設計活動とともに自身の設計の論理を明示する言説活動を併走させていると言える。建築家^{注1)}の創作活動におけるこのような設計論^{注2)}においては、個別の作品の創作に即した一回性の試みの表明のみならず、複数の作品の創作を通して展開する設計思想とその論理を読み取ることができるものがある。特に、共通した主題のもとで構想される一連の建築作品（以下、連作^{注3)}）においては、その主題のもとに個別の作品の建築表現をいかに展開させたかといった思考を明確に読み取ることが可能であると考えられる。こうした建築表現を展開させる思考は、建築家が継続的に作品を創作するための方法論のひとつであると考えられることから、建築の創作における重要なテーマが内包されていると言える。こうした思考の重要性について、著名な建築ジャーナリストのひとりである馬場瑋造は、著書『生残る建築家像』^{注4)}において、「オリジナルを表出するということは、性急にオリジナルを求めるのではなくて、同じデザイン・コンセプトを一作毎に推敲しながら、よりデザイニク表現の高いものへと仕立てていくことなのである。・・・そうした軌

跡全体がオリジナルなのである」と論じ、長期に亘る設計活動のなかで建築家が社会に痕跡を残すための重要な資質として、継続的なデザインの展開力を指摘している。

以上のことから本研究では、現代日本の建築家が自身の連作について著した設計論（以下、連作に関する設計論）を資料として^{注5)}、建築表現の展開に関する思考の枠組みの一端を明らかにし、継続的な作品創作の方法論を構築する上での新たな視座を得ることを目的としている。また上記の観点に加えて、作品の創作を通して建築表現を展開させる思考は、時間の経過のなかで建築をどのように認識するか（以下、時間認識）に関わる点でも重要な意義をもつと考えられる。筆者らは、既報^{注6)}において、時間認識が建築の創作に関わる重要なテーマのひとつであることを指摘した上で、増改築建築の設計論を題材として、これを検討し、報告した。そこでの時間認識は、既存の建物という建築家にとって外在的とも言えるファクターへの考えを巡らせるなかでの思考であった。一方、本報で検討する連作に関する設計論には、一連の時間経過のなかで設計された自身の作品群という建築家にとって内在的なファクターへの時間認識が含まれると考えられることから、ここでの成果は、既報での検討とは対極的な時間認識の枠組みを位置づけることでもあると言える。

本論文は 2009 年度建築学会大会学術講演会で発表されたものを修正してまとめたものである。

* 宇都宮大学 地域デザイン科学部 建築都市デザイン学科
助教・博士(工学)

** 日本設計 修士(工学)

*** 東京工業大学 環境・社会理工学院 建築学系
教授・博士(工学)

Assist. Prof., Dept. of Architecture and Urban Design, Faculty of Regional Design,
Utsunomiya Univ., Dr.Eng.
NIHON SEKKEI, INC., M.Eng.
Prof., Dept. of Architecture and Building Engineering, School of Environment and
Society, Tokyo Tech., Dr.Eng.

1.2. 本研究に関連する既往研究

本研究で着目している連作とは、前節で述べたように、共通の主題のもとに構想された一連の作品のことである。このような連作に関する創作活動を対象とした既往の研究としては、特定の建築家に着目した作家論的なものが多くみられた。それらのなかで連作を構成する作品群の実体的側面に着目したものとして、林、末包による広瀬鎌二の鉄骨住宅作品「SH」シリーズにおける空間構成と架構形式の類型を検討したもの^{注7)}や、内山、山名らによる前川國男の木質パネル構法「プレモス」シリーズにおける壁や屋根などの部材構成の変遷を検討したもの^{注8)}などが挙げられる。また、本研究と同様に連作に関する建築家の言説活動に着目したものとして、朽木によるアルド・ファン・アイクの一連のダイアグラム「オッテルロー・サークル」シリーズに関する言説における主題の変遷を検討したもの^{注9)}や、林、土居による篠原一男の「亀裂の空間」シリーズに関連した言説における「亀裂」の意味内容の変遷を検討したもの^{注10)}などが挙げられる。こうした特定の建築家の連作に着目した研究は、作家の創作活動全般に対するものではないものの、共通の主題のもとに構想された一連の作品に限定し、建築表現の展開の仕方やそれに関する思考を明確に浮かび上がらせることで、特定の建築家の創作活動に関する新たな視点を明らかにし、成果を挙げてきたと言える。これらに対して本研究は、現代日本の建築家によって著された、建築表現の展開に関する数多くの言説を分析対象として、その意味体系の総体を明らかにするものであり、多くの建築家の言説を共時的に享受するなかで建築の思考が形成されていると考えられる現代的な状況に対して有益な示唆を与えるものとする。

1.3. 本研究の概要

先に述べたように、本研究の狙いは、現代日本の建築家による連作に関する設計論から、共通の主題のもとに個別の作品の建築表現をいかに展開させたかに関する言説を読み取り、その総体を位置付けることである。こうした観点から、図1の分析例 No.15 の設計論では、まず、「住宅というプライベートな空間は、外部に対してできるだけ閉じた世界であるべきだ」という素朴な直観からはじめた私の住宅設計の作業によって、この3年間に3つの住宅が完成した。」という記述から、内部空間と外部の関係性を、3作品に通底した主題（以下、一連の作品に共通する主題を『連作の主題』^{注11)}とする）とすることが読み取れる。また、こうした主題のもと、3作品の具体的な建築表現に関する記述をみると、「3つの住宅とも割合明確な機能を持つ部屋を小箱と考え、〈閉じた箱〉の内部にそれを入れ込むことで、計画的に住宅として成立させている。」という箇所から、3

作品を同様な建築表現で具体化していることが読み取れる。これは、連作を構成する作品群相互の建築表現に関する関係性（以下、『建築表現の関係性』）を示すものと言える。さらに、上述の個別の作品における建築表現を統合する「閉じた箱」といった原型的なモデルとでも言える記述もみられる。これは、「この3つの住宅が〈閉じた箱〉という私が建築家として最初にもった素朴な空間意識を通して・・・」という記述から、このモデルをあらかじめ念頭において3作品の建築表現を構想したことが読み取れる。このような建築表現の基となるモデルの想定形式（以下、『モデルの想定形式』）に関する記述は、建築家が一連の作品群の建築表現を脈絡なく行うのではなく、論理的に展開していることを示していると言える。つまり『建築表現の関係性』に加えて『モデルの想定形式』は建築表現を展開させる方法論における重要な思考と位置づけることができる。ここまで検討してきた分析例 No.15 以外の全ての資料についても通読したところ、同様な読み取り（『連作の主題』、『建築表現の関係性』、『モデルの想定形式』）が可能であった。

以上のことを鑑みて、本研究の概要について述べると、本章に続く2章では、資料とした連作に関する設計論から、『連作の主題』として明確に読み取れる箇所を抽出し、その意味内容を分析、整理する。次に3章では、『建築表現の関係性』に関する言説とともに、『モデルの想定形式』に関する言説も抽出し、それぞれの意味内容を整理した上で、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』の対応関係を検討することで、建築表現を展開させる思考の枠組みを位置づける。そして、4章では『連作の主題』の意味内容ごとに、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』の対応関係を検討することで、共通の主題のもとに個別の作品の建築表現をいかに展開させたかに関する思考の特徴を考察する。

2.『連作の主題』の意味内容

資料とした設計論から抽出した『連作の主題』について通読したところ、その意味内容は多岐にわたっていた。そこで、それらを KJ 法的^{注12)}に相互に比較検討した。その結果、【形態に関する主題】^{注11)}【空間に関する主題】【構成に関する主題】【構法・技術に関する主題】【周辺環境との関係に関する主題】（以下、それぞれを【形態】のように略記する）の5つの大枠で捉えることができた^{注13)}（表1^{注14)}）。以下、それぞれの具体的な内容を詳述する。

【形態】は、建築の実体的側面にあらわれるかたちに関する事柄を主題として論じたものである。それらは、「サイコロの主題による家では、建築の用途と形象との関わりを、さらに断絶させることを試

No.15 建築としての住宅——乾いた空間のために / 坂本一成 / 新建築 7110

住宅というプライベートな空間は、外部に対してできるだけ閉じた世界であるべきだという素朴な直観からはじめた私の住宅設計の作業によって、この3年間に3つの住宅が完成した。最初の作品である〈散田の家〉と前作〈水無瀬の町家〉、そして今回の〈登戸の家〉である。・・・私にとって3つの住宅がひとつの連作だと考えるようになった。それは、この3つの住宅が〈閉じた箱〉という私が建築家として最初にもった素朴な空間意識を通して、私自身の状況と社会の状況を直接投影してきたひとつの結果であることを意味している。・・・3つの住宅は・・・雑然として混乱した現代の都市での状況が、その〈閉じた箱〉という素朴でしかもプライマリな空間概念そのものの直接的成立条件になっている。・・・3つの住宅とも割合明確な機能を持つ部屋を小箱と考え、〈閉じた箱〉の内部にそれを入れ込むことで、計画的に住宅として成立させている。そして各住宅とも、小さな箱を入れ込んだ残りの部分を居間、食堂等の割合不明確な住機能のためにあてがい、各住戸の主たる空間にしようと試みている。

2章『連作の主題』の意味内容

●『連作の主題』:

外部に対して閉じられた空間
⇒【空間に関する主題】

3章 建築表現を展開させる思考

●『建築表現の関係性』:

全ての作品を同様な建築表現で具体化
⇒【類似系】

●『モデルの想定形式』:

あらかじめ創作の基となるモデルを念頭におき、それに基づいて作品を創作していく
⇒『演繹的形式』

図1 分析例

みた。であるからこの作品は涅槃の家、無為の家に続く一連のものであり、考え方をさらに押し進めたものである。建築の形態を成立させる外皮に独自の意味性を持たせることによって、形象自体の自立性を明確にさせること。・・・かつて形態は権力の象徴であったり、宗教の尊厳を維持するためのものであった。・・・権力や、かつての宗教や虚構的な用途から開放されて、形態自体が自立して語ることが始めなければならない。(22) ^{注1)}のように、形態のもつイメージを主題として論じるものと、「3つの作品を発表するこの機会に、現在の私が関心を抱いている建築の構成原理について・・・述べてみたい。・・・スリットの手法は住宅設計における新しい建築的構成原理のひとつとなりえる可能性を持っている。これまでひとつの建築にはひとつの形態的表現と考えられていたものを、スリットの空間を挟むことで、ふたつまたはそれ以上の形態の組み合わせという複合的なかたちに転換させ得る点が重要である。(47)」のように、形態の創作方法を主題として論じるものが多くみられた(これら2つの細項目にそれぞれ約4割の資料が該当)が、「私が正多角形に魅力を感じているのは、正多角形が誰かが誰かのためにつくった形で

はなく、またその敷地のためだけにつくられた形でもなく、そしてそれ以上動かない形である、という自立性であるかもしれない。・・・いくつか正多角形の建築を設計して・・・(139)」のように、形態そのものの特徴を主題として論じるものもみられた。

【空間】は、床や壁などの建築の構成要素で境界づけられた三次元的な広がりをもつヴォリュームに関する事柄を主題として論じるものである。それらの多くは、「つなぐ」とか“移動する”とかいう、ただそれだけの空間・・・機能的に特化していないぶん、人もそこに固定した先入観なしに自らの行為を発見しやすいのではないかと考えたのだ。そして以後、この空間を、場所と場所をつなぐもうひとつの場所としてとらえ、積極的に位置づけようとしてきた。(102)」のように、人間の活動を充足する空間を主題として論じるもの(約4割の資料が該当)と、「これらの作品ではまず住宅は、外部と接触をつくるということよりは、本質的な性格として、内部を明確に境界づけることと、外殻の閉合性そのものに主眼が移されている。(24)」のように、内部空間の外部との関係性を主題として論じるもの(約3割の資料が該当)であった。その他に、「奈良県立民俗博物館、知多

表1 『連作の主題』の意味内容

(36)	【形態 に関する主題】	形態のもつイメージ [a] (15)	この建築(佐野市文化会館)には地方都市における文化活動の核となる建築をいかにアイデンティファイさせ、そしていかなる手法でシンボル化するか・・・この建築の中央の位置を占めるメタモールの形態はこの建築のアイデンティティとシンボル化に対するすべてである・・・橋門増状に表出した形態は「どんづまり」といった地域性に対する巻き返しにも似たイメージを表現したものであり、・・・「竹の塚の住宅」、「流山の住宅」、そして「今市市文化会館」などにおいて表現された形態も同様な設計意図の中に構築されたものであった。⇒No.37
		形態の創作方法 [b] (14)	この3年間で、軽井沢に5件の別荘の設計を行った。・・・その場所での形になった原因はすべて木に由来する。「120度の家」はマユミという幹のねじれた木がたくさん生えていた。・・・建物の複雑な形態はマユミを眺めていたゆえかと思う。「万華鏡の家」の敷地は雑木林だった。シラカバとホウノキという大きな放射状の葉がつく木が印象に強く残った。回転性を持たせようと思ったのは、このホウノキがきっかりかもしれない。今回発表する「水平線の家」と「緑陰の家」は、道を隔てて向かい合っている。・・・ともに周りをカラマツの林で囲まれていた。・・・カラマツの強い垂直性から、四角い建物がふさわしいと思った。⇒No.151
		形態そのものの特徴 [c] (7)	この「徳丸小児科」の内部に配置したサインカーブの壁面や仰角60°の壁面と天井面、6寸勾配の天井面など・・・である。それらのかたちの選択の仕方は「鴨居の家」、「緑ヶ丘の家」で100°という鈍い角度の斜行する線を選び、45°という強い角度を避けてきたときの選択の仕方に近い。・・・ここで使ったかたちは幾何学の基本図形である円や三角に視覚的に還元できるというより少し不完全さを残すようずらしたもので、完結したかたちに対し、曖昧なかたちともいえるものになっていると思う。⇒No.38
(43)	【空間 に関する主題】	人間の活動を充足する空間 [d] (19)	私は「小さい木箱」の発表に際して、「建築家のつくるべき住宅は小さければ小さいほど、生活を限定しないのびやかな空間が必要である」と書いた。今回のふたつの住宅(傾斜地の木箱、段地の木箱)は小規模であり、広い空間の獲得には物理的な限界があった。しかし私はいつものように住宅内にのびやかな空間を求めた。⇒No.98
		内部空間の外部との関係性 [e] (14)	住み手の生活意識と、設計者の空間意識の複合化の実践過程として、1968年から1972年にかけて三つの住宅(泉の家、富士見ヶ丘の家、茅ヶ崎の家)を設計した。いずれも白い吹抜のある、都市に対して開いた空間の住宅である。⇒No.27
		空間の与える知覚的印象 [f] (6)	「仁保の郷」における透明性は、大きな屋根に覆われた内部空間と外部空間を、内と外を結ぶデッキや橋によって視覚的にも空間的にも簡明に連続させた点にある。・・・「TAG」は、・・・スペースそのものの透明性をつくり出すことを強く意識している。・・・「再生木ルーバーハウス」における透明性は・・・半透明なスクリーンと内部スペースの境界をできるだけ透明に表現し、外部スペースを取り込んだ透明で広がりのある内部空間を生み出そうとした。・・・3つのプロジェクトなりの特徴をもった透明なスペースを生み出すことができたと思っている。⇒No.120
		空間の公共性 [g] (5)	第1期から第6期までのプロセスを改めて振り返って見ると、・・・もしも、ヒルサイドテラスが20年以上の年月の中で、都市の中で生きたひとつの風景を提供しているとするれば、おそらく前面の歩道も含めたパブリック・スペースの存在であろう。先に述べたように、第1期から小さくはあるがさまざまなパブリック・スペースの展開が試みられている。⇒No.82
(40)	【構成 に関する主題】	部屋の配列 [h] (17)	いくつかの部屋に分けた方がいいのか、その場合それらをどのように並べればいいのか、さまざまな関係のつくり方があると思うんです。「スタッドシアター」や「梅林の家」は部屋がくっついたものだし、「金沢21世紀美術館」は部屋を離しています。・・・「スタッドシアター」の場合、壁が2枚になればもっとクリアになったと思います・・・だからある意味では、「トレド美術館ガラスセンター」はその発展形です。壁がダブルになることで、各部屋の関係性がさらに変わってきています。⇒No.132
		部位・部材の配列 [i] (15)	私の場合、これまで並置された壁の集積によって、やわらかな構造を組み立てることを試みてきた。・・・この「齋藤記念館」も同列に位置づけることができる。つまり、「梶原邸」、「風間邸」、「西園寺無量寿堂」、「GKDビルディング」、「東京都戦没者霊苑」の作品は、平行系の壁を配置しながら、諸々の事象に交感してきたものとしてまとめることができる。⇒No.70
		構成要素の統合方法 [j] (7)	このPROJECT MIZOE-3は、以前発表したMIZOE-1、MIZOE-2に続く連作のシリーズのひとつであって、空間や壁の重層性、あるいは散逸が意図された・・・私が意図した・・・考えは、各部分の構成を統合していくためのものでは決してない。⇒No.81
		外部を囲う建物の配置 [k] (5)	正面のない家第1作は、1961年1月。今考えてみても、コートハウス、就中坂倉コートハウスの特長を、実によくいい表わしているこのタイトル。・・・第2回目は1962年10月。この時は、2軒(正面のない家K、正面のない家H)まとめて発表。・・・今度の3回目(続・正面のない家)の発表に、意外と手間取ってしまったが、私としてはずうっと一連のコートハウスのつもりで・・・ ⇒No.40
(41)	【構法・技術 に関する主題】	建物を造る材料 [l] (17)	この中古木材シリーズ(独楽蔵のアトリエ、若山邸、みの虫、むさしのアルプス、電柱岩)も早や7歳。・・・建設の物質消費性、木材への愛着をテーマに、「使えるものは、とことん使おう」と、建築デザインを軸に、消費文明の爛熟期ヘデモンストレーションをかけた故である。⇒No.35
		建物の構造 [m] (16)	2次元的に曲がりやすい木でグリッドの構造をつくれば、その上に直接屋根を葺くこともできる上に、木は引っ張り材にも圧縮材にもなるので、・・・圧縮系のシェル構造としても成立するのではないかと考えたのである。その後、宇野千代博物館計画、今井病院附属託児所、今井篤記念体育館、パンパー・ルーフ、フライ・オートー・ラボラトリー計画と、木造(竹)編構造の開発を続け、その集大成としてこのボンビドー・センター・メスの屋根が完成した。⇒No.157
		生産の仕組み [n] (15)	住居生産をどうしたら工業生産に結びつけることができるか、というテーマは、ここ数年来の研究室の主なテーマであり、・・・ここに報告する6戸の住居(住宅 No.38、No.39、No.41、No.43、No.44、No.45)もこの主テーマの展開の中より生れ出たものである・・・ばくのといった方法は、・・・住居をコンポーネントに分解し、コンポーネントデザインとそれを集めるデザインを個別に追求してゆく方法がある。コンポーネントは個々の実施設計とは別個の立場で設計され、生産システムにのせられる。⇒No.7
【周辺環境との関係 に関する主題】 (4)			美しいこの土地の自然が破壊されてゆくのを目の当たりにし、人間の横暴さを感じずにいられない。・・・私の家の近隣に私が手がけた住宅は、我が家を含めて7軒(自神山の家1〜7)完成し、今後も数件の住宅を設計することになる。美しい現在の自然を残しながら、どのようにすれば自然と共存できる家を建ててゆくことができるかが、これからもこの地域での住宅設計の大切な課題になることと思う。⇒No.46

表1 注1) 各項目の括弧内の数字は該当資料数を示す。『連作の主題』の内訳の意味内容は重複することがあるため、内訳の総数が大枠の意味内容の該当数と必ずしも一致しない。
注2) 具体例の文章における括弧の中に書かれた作品名は、筆者らが加筆している。

市民俗資料館、浜松市博物館、蒲郡市郷土資料館を経てこの計画に至るまで一貫して考えてきたことは、展示室という閉ざされた空間から受ける心理的圧迫感、展示物から受ける緊張感をどのように開放させるか・・・ということであった。(43)」のように、空間の与える知覚的印象を主題として論じるものと、「OXY 乃木坂、D-HOTEL OSAKA、TERRAZZA という3つの都市商業施設を例にとりて、・・・共有し得る都市空間の提案という意図の所在と行方を眺めてみたい。(80)」のように、空間の公共性を主題として論じるものもみられた。

【構成】は、建築的要素の配置・配列関係に関する事柄を主題として論じるものである。それらのうち多くみられた内容として、「3つの住宅はすべて、コンクリートの単純で頑健な箱の内に、さまざまな部屋をもうひとつの箱として格納する方法をとっている。(39)」のように、部屋の配列を主題として論じるもの(約4割の資料が該当)と、「屋根を反復させて架けることによって、建築的表現を確保しながら、平面的、空間的自由度が大きく増すということである。私はこれらの理由から建築的ソリューションのひとつとして多重屋根方式とでも呼べる考え方に到達したのである。(42)」のように、部位・部材の配列を主題として論じるもの(約3割5分の資料が該当)が挙げられる。これらと比べて少数であるが、「各建築構成要素を努めて等価値に並存させようとしてきた従来までの私のアプローチに、変更を促すものではなかった。つまり、家具のスケール、部屋のスケール、建物のスケールで発想を分節、分断化させるのではなく、同じシステムが、スケールをこえて反復し並存するという表現方法は、そのままこの3つのプロジェクトでも展開された。(60)」のように、建築的な構成要素の統合方法を主題として論じるもの、および「3作品は共通してヴォイドなスペースを建築が囲い込む、いわば古典的なコートヤードハウスととらえている。(97)」のように、外部を囲う建物の配置を主題として論じるものも見出すことができた。

【構法・技術】は、建物の造り方やそれに関わる技術に関する事柄を主題として論じるものである。これには、「コルゲート鋼板と呼ばれる波型成型板による試みは今回で6件目となる。(111)」のように、建物を造る材料を主題として論じるもの、「これらスチールシートを外皮に使った住宅は、客船のようにそれ自体が外装材と構造材を兼ねた1枚のスチールシートで包み、建物本体とは別に、外皮が自立するモノコック的構造を試みた構造体である。(110)」のように、建物の構造を主題として論じるもの、および「工業化、ないしは量産化を本当に意識して住宅計画の組織化に手をつけたのは、・・・20番台の後半から30番台のはじめごろである。本誌に発表した332型は、組織化の最初の段階であって、・・・組織化の次はプラントとの技術的交流による新しい時代に入る。(11)」のように、建築を生産する仕組みを主題として論じるものといった3つの内容がみられ、それぞれ同程度の資料数が該当した。

以上で述べてきた4つの大枠の意味内容に資料の大半が該当した(160/164資料)。一方、該当する資料は僅かではあるが、敷地周辺の都市や自然などの環境との関係を主題として論じる【周辺環境との関係】といった意味内容もみることができた^{注15)}。

3. 建築表現を展開させる思考

1章の研究の概要で述べたように、連作に関する設計論においては、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』とに関する記述よ

り、建築表現を展開させる思考の重要な側面が読み取れることから、それぞれについて分析・整理した上で、対応関係を検討する。

3.1. 連作における『建築表現の関係性』

連作を構成する作品群における『建築表現の関係性』の検討に際して、まず、作品間の建築表現の関係について詳説する。資料とした設計論において、作品間における建築表現の関係に関する言説を抽出して検討したところ、例えば、「パブリック的な空間：【空間】」という主題に対して「第6期の計画は・・・道路に沿ってガラスの細長い、ささやかではあるが透明な内部のパブリック・スペースが設けられ、・・・こうしたスペースは第1期や3期にも設けられている(図2, 具体例No.82)」のように、作品間の類似性を主調とする資料と、「木造建築：【構法・技術】」という主題に対して「おのおのの施設に適した木構法を検討することにした。つまり、適材適所におおのの構法の特徴を生かし・・・(図2, 具体例No.51)」のように、主題を共有しながらも具体的な建築表現の水準で作品間の差異性を主調とする資料がみられた。また、以上のような記述がないものでも、個別の作品の建築表現に関する具体的な記述を読み込むことで、作品間の建築表現の類似性と差異性を判断できる^{注16)}。例えば、「微妙にずらした曖昧なかたち：【形態】」という主題に対して「かたちの選択の仕方は鴨居の家、緑ヶ丘の家で100°という鈍い角度の斜行する線を選び、45°という強い角度を避けてきた・・・(図2, 具体例No.38)」のように、複数の作品の建築表現を一括して記述しているものは建築表現に類似性があるものとして、それに対して「平面は幾何図形を複合させた：【形態】」という主題に対して「八戸市立図書館はふたつの正方形を、中心を軸として45度ずらせている。秩父市立図書館は1/4円の中心点にふたつの扁平な長方形を交わらせている。(図2, 具体例No.54)」のように、個別の作品ごとに建築表現を記述しているものは建築表現に差異性があるものとして分類した。

作品間の具体的な表現に関する上記の判断は、必ずしも連作を構成する全ての作品群に亘るものではなく、資料によっては、作品間における類似性と差異性が組み合わされるものもみられた。そこで、一連の作品群における『建築表現の関係性』については、上述の設定に基づいて、連作を構成する全ての作品間で建築表現に類似性が認められるか否かを検討することで、類似性に基づいた関係が多いものを【類似系】^{注11)}、差異性に基づいた関係の多いものを【差異系】、および双方の関係が同数のものを【混合系】といった3つで整理した(図3^{注14)})。

3.2. 『モデルの想定形式』の内容

『モデルの想定形式』とは1章で定義したように、具体的な建築表現の基となるモデルをいかに想定して一連の作品を創作したかである。こうした『モデルの想定形式』に関する言説を抽出し、その内容を検討したところ、あらかじめ建築表現の基となるモデルを設定した上で一連の作品を創作するもの(《演繹的形式》^{注11)})と、建築表現の基となる理想的なモデルを一連の作品の創作を通して模索するもの(《帰納的形式》)の2つに分類することができた。例えば、図4^{注14)}の抽出例No.57は、「モデル住宅をつくった翌年あたりから、年に1、2軒のペースで二重壁構法のブロックの住宅を建ててきて、・・・」という記述から、あらかじめモデル住宅を創作した上でそれに基づき一連の作品を設計したと読み取れるため、《演繹的形式》として捉えることができる。これに対して、図4の抽出例No.137は、

<p>類似性に基づく関係 =</p> <p>・類似性を主調とする。</p> <p>例. No.82 『時と風景 ——東京へのオマージュ』</p> <p>「第1期から小さくはあるがさまざまなパブリック・スペースの展開が試みられている。…第6期の計画は…道路に沿ってガラスの細長い、ささやかではあるが透明な内部のパブリック・スペースが設けられ、店舗などのスペースは少し後退させてある。こうしたスペースは第1期や3期にも設けられている…」</p>	<p>・複数の作品を一括して記述する。</p> <p>例. No.38 『非装飾が装飾化する可能性を開始する』</p> <p>「かたちの選択の仕方は『鶯居の家』、『緑ヶ丘の家』で100°という鈍い角度の斜行する線を選び、45°という強い角度を避けてきた…私は通常どちらかという微妙にずらした曖昧なかたちを選択しようということがほとんどである」</p>
<p>差異性に基づく関係 ≠</p> <p>・差異性を主調とする。</p> <p>例. No.51 『コミュニティ施設を木造でつくる』</p> <p>「豊里町の一連のプロジェクトには、僕たちの木造建築への思い入れと問題意識とが反映されている。…僕たちは、おのおのの施設（バツハの森コミュニティセンター、町民センター+宿舍あかまつ、昆虫館ファープル）に適した木構法を検討することにした。つまり、適材適所におおのの構法の特徴を生かし、求められる空間に対応させようという試みである。」</p>	<p>・個別の作品ごとに記述する。</p> <p>例. No.54 『3つの図書館と幾何学』</p> <p>「図書館の平面は幾何図形を複合させた構成をとっている。八戸市立図書館はふたつの正方形を、中心を軸として45度ずらせている。秩父市立図書館は1/4円の中心点にふたつの扁平な長方形を交わらせている。」</p>

図2 作品間における建築表現の関係

<p>【類似系】</p> <p>・全ての作品の建築表現が類似性に基づく (47)</p> <p>$A = B = C = \dots$</p> <p>例. No.40 $A = B = C \neq D$, 例. No.150 $A = B \neq C = D$ など</p> <p>(54)</p>	<p>【混合系】</p> <p>・類似性に基づく関係と差異性に基づく関係が同数</p> <p>例. No.24 $A = B \neq C$, 例. No.46 $A = B \neq C = D \neq E$ など</p> <p>(24)</p>	<p>【差異系】</p> <p>・全ての作品の建築表現が異なる (61)</p> <p>$A \neq B \neq C \neq \dots$</p> <p>例. No.67 $A \neq B \neq C \neq D \neq E$ など</p> <p>(74)</p>
--	---	---

図3 連作における『建築表現の関係性』

<p>《演繹的形式》 (85)</p> <p>モデル → 連作を構成する作品</p>	<p>→ あらかじめ建築表現の基となるモデルを設定した上で、一連の作品を創作。</p> <p>例. No.57 『コンクリート・ブロック造の住宅 3題』</p> <p>「それから4年ほどして、ブロック造のモデル住宅をつくった。ブロックを生産販売している人たちの協会、北海道建材ブロック協会が中心になって、ブロック建築の普及促進を図るために、モデル住宅をつくることになったのである。…私も、モデル住宅をつくった翌年あたりから、年に1、2軒のペースで二重壁構法のブロックの住宅を建ててきて、今年は自宅から数えて10軒目を計画している。」</p>
<p>《帰納的形式》 (79)</p> <p>連作を構成する作品 → モデル</p>	<p>→ 建築表現の基となる理想的なモデルを一連の作品の創作を通して模索。</p> <p>例. No.137 『共有するプロセス、事後的なプランニング』</p> <p>「今回掲載の『T-HOUSE』『花見川の家』および『殻の家』の3つのプロジェクトを通して、『空間の原形』への試みを具体的に説明したい。…生活のためのプランニングとは、将来的には変更になる可能性をもつ設計時点での与条件に基づいて、個々の住宅としての『設え』を事後的に付加する作業だと位置づけている。可能な限りその割合を少なくし、設えが付加される前の空間の原形に近い状態で、住宅としての『空間の質』をつくり出せることが、最終的な到達点だと考えている。」</p>

図4 『モデルの想定形式』の内容

《演繹的形式》

【類似系】

【混合系】

【差異系】

26

9

44

79

28

15

30

73

【類似系】

【混合系】

【差異系】

《帰納的形式》

図5 『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』の関係

「設えが付加される前の空間の原形に近い状態で、住宅としての「空間の質」をつくり出せることが、最終的な到達点だと考えている。」という記述から、一連の作品の創作を通して住宅的な設えが付加される前の空間の原形を追求していると読み取れるため、『帰納的形式』として捉えることができる。こうした方法で全ての資料を検討したところ、『演繹的形式』と『帰納的形式』とはほぼ同数みられた (85 資料: 79 資料)。

3.3. 『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』との関係

前節までに検討してきた『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』の対応関係を示したのが図5¹⁶⁾である。これより、『演繹的形式』においては、[差異系]が半数以上みられた (44/79 資料)。このことから、あらかじめ想定された建築表現の基となるモデルに基づいて一連の作品を創作する場合は、そのモデルからいかに多様な建築表現を創出できるかを試みる思考が基調になっていることが窺える。一方、『帰納的形式』においては、[類似系]と[差異系]が同数程度みられた。このことから、建築表現の基となる理想的なモデルを一連の作品の創作を通して模索する場合は、作品ごとに設計条件が異なるものの、ひとつの建築表現の可能性を反復する思考

と、作品ごとの設計条件に応じて、多様な建築表現のパリエーションを試す思考の双方が基調となっていることが窺える。さらに、該当資料数が少ないカテゴリーではあるが、[混合系]に着目すると、『演繹的形式』と比べて割合が高いことから、建築表現における作品間の関係を様々に試みながら理想的なモデルを模索している傾向があることも分かる。

4. 『連作の主題』と建築表現を展開させる思考との関係

資料とした連作に関する設計論において、共通の主題のもとに個別の作品の建築表現をいかに展開させたかを検討するために、『連作の主題』の意味内容ごとに、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』との対応関係を示したものが図6¹⁶⁾である。さらに、図6では、『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』の組合せごとに『連作の主題』の意味内容の細項目も示している。

まず、【形態】と【空間】では、『モデルの想定形式』(『演繹的形式』と『帰納的形式』)の該当数における顕著な違いはみられないものの、『建築表現の関係性』([類似系]、[差異系]、および[混合系])の内訳において、【形態】では『モデルの想定形式』によらずほぼ

同程度であるのに対して、【空間】では『モデルの想定形式』に応じて偏りがみられた。このことから、これらの主題のもとでは、『モデルの想定形式』ごとの「類似系」、[差異系]、および「混合系」といった内訳が、建築表現を展開させる思考を特徴づけていると言える。一方、【構成】と【構法・技術】においては、『モデルの想定形式』の該当数における偏りが顕著であることから、これらの主題のもとでは、『演繹的形式』と『帰納的形式』といった建築表現の基となるモデルの想定の仕方が、建築表現を展開させる思考を特徴づけていると言える。こうしたことを踏まえて、以下に

【形態】 a)形態のもつイメージ b)形態の創作方法 c)形態そのものの特徴 32

【空間】 d)人間の活動を充足 e)外部との関係性 f)知覚的印象 g)公共性 (細項目は略記) 41

【構成】 h)部屋の配列 i)部位・部材の配列 j)構成要素の統合方法 k)外部を囲う建物の配置 38

【構法・技術】 l)建物を造る材料 m)建物の構造 n)生産の仕組み 37

図6 『連作の主題』における『建築表現の関係性』と『モデルの想定形式』の関係

詳細を考察する。

4.1.【形態】と【空間】における建築表現を展開させる思考

まず、【形態】と【空間】について、『モデルの想定形式』ごとの内訳である『建築表現の関係性』の該当数に着目して検討を行う。

【形態】では、『演繹的形式』と『帰納的形式』における『建築表現の関係性』の内訳が同程度であり、双方とも「差異系」の占める割合が高い（『演繹的形式』では 10/16 資料、『帰納的形式』では 9/16 資料）。さらに、こうした『演繹的形式』と『帰納的形式』における「差異系」について、『連作の主題』の意味内容の細項目に着目すると、全ての細項目がみられることが分かる。以上のことから、まず、実体的側面にあらわれるかたちを題材とした建築表現については、建築表現の基となるモデルの想定の仕方によらず、そのバリエーションを創出しようとする思考¹⁷⁾（「差異系」）が基調となっていることが窺える。さらに、こうした思考は、形態のもつイメージ（a）、形態の創作方法（b）、および形態そのものの特徴（c）といった、かたちに関する全ての具体的内容においても通底してみられる一貫性をもったものであることも窺える。

一方、【空間】では、『演繹的形式』と『帰納的形式』における『建築表現の関係性』の内訳に差がみられた。『演繹的形式』においては、「類似系」と「差異系」との対応がみられる（「類似系」が 10/21 資料、「差異系」が 8/21 資料）のに対し、『帰納的形式』においては、「類似系」と「混合系」との対応がみられる（「類似系」が 9/20 資料、「混合系」が 7/20 資料）。このことから、非実体的な性格の3次元的なボリュームを題材とした建築表現については、建築表現の基となるモデルの想定の仕方に応じて、一連の作品群における建築表現の関係性を選択する柔軟な思考が窺える。具体的には、あらかじめ建築表現の基となるモデルを念頭において一連の作品を創作する場合は、そのモデルを用いて同様な建築表現を繰り返す画一的な思考（「類似系」）と、多様な建築表現を創出してモデルの汎用性を試す思考（「差異系」）とが多くみられるのに対して、建築表現の基となる理想的なモデルを一連の作品の創作を通して導出する場合は、ひとつの建築表現の可能性を反復しながら追求する思考（「類似系」）と、作品間の建築表現の関係を様々に試しながら模索する思考（「混合系」）とが多くみられる傾向がある。

4.2.【構成】と【構法・技術】における建築表現を展開させる思考

【構成】と【構法・技術】については、『モデルの想定形式』の該当数に着目すると、【構成】では『演繹的形式』が、【構法・技術】では『帰納的形式』が、それぞれ多くみられた（前者は 26/38 資料、後者は 23/37 資料）。以下、これを踏まえて検討する。

まず、【構成】の特徴を示す『演繹的形式』について、『建築表現の関係性』の内訳をみると、「差異系」が大半を占めている（19/26 資料）。このことから、建築的要素の配置・配列関係を題材とした建築表現については、建築表現の基となるモデルをあらかじめ設定して、それに基づいて様々な建築表現を創出しようとする思考を基調としていることが窺える。

次に【構法・技術】についても同様に検討する。該当数の多かった『帰納的形式』の『建築表現の関係性』に関する内訳では、「類似系」および「差異系」との対応がみられる（「類似系」が 11/23 資料、「差異系」が 9/23 資料）。さらにそれらにおける『連作の主題』の意味内容の細項目をみると、「類似系」では生産の仕組み（n）が多

いのに対し、[差異系]では建物を造る材料(l)および建物の構造(m)が多いことが分かる。以上のことから、まず、建物の造り方やそれに関わる技術を題材とした建築表現については、作品の創作を試験的な段階とし、ひとつの建築表現の可能性を追求する方法（[類似系]）と様々な建築表現を試みる方法（[差異系]）との対照的な方法により、新たな建築技術や生産方法の実現を目指そうとする思考を基調とするなかで、これらの対照的な方法は、建物の造り方やそれに関わる技術に関する具体的な内容に応じて柔軟に使い分けており、新たな生産の仕組みを実現するためには、ひとつの建築表現の可能性を追求するのに対し、新たな材料や構造を用いた建築表現を実現するためには、様々な建築表現を試みる傾向があると言える。

5. 結

以上、連作に関する設計論の言説を分析することで、共通の主題のもと建築表現をいかに展開させたかに関する思考の枠組みを検討した。本論は、建築表現を展開させる思考を、一連の作品群における建築表現の関係性と、建築表現の基となるモデルの想定の方から捉えた上で、それを主題ごとに検討したものであった。

2章では、一連の作品に共通する主題の意味内容について、5つの大枠で捉えられることを示した。続く3章では、建築表現を展開させる思考を、建築表現の関係性と建築表現の基となるモデルの想定の方から検討した。建築表現の関係性については、作品相互の建築表現の類似性と差異性から3つに分類でき、建築表現の基となるモデルの想定の方については、演繹的な想定の方と帰納的な想定の方の2つで捉えることができることを示した。さらにこれらの対応関係を検討することで、あらかじめ想定された建築表現の基となるモデルから多様な建築表現を創出しようとする思考、および建築表現の基となるモデルの模索のために、ひとつの建築表現の可能性を追求し続ける方法と多様な建築表現を試し続ける方法をとろうとする思考が基調になっていることを明らかにした。

4章では以上のことを踏まえて、主題の意味内容ごとに、建築表現の関係性と、建築表現の基となるモデルの想定の方との対応関係を検討した。その結果、実体的側面にあらわれるかたちを題材とした建築表現については、建築表現のバリエーションの創出が、建築表現の基となるモデルの想定の方によらない一貫したものであり、非実体的な性格の強い空間を題材とした建築表現については、建築表現の基となるモデルの想定の方に応じて、一連の作品群における建築表現の関係性を選択する柔軟な思考が基調となるといった、相反する特徴がみられた。また、建築的要素の配置・配列関係を題材とした建築表現については、汎用性のあるモデルをあらかじめ設定して、それに基づいて多様な建築表現を創出しようとする傾向と、建物の造り方やそれに関わる技術を題材とした建築表現については、作品の創作を試験的な段階とし、ひとつの建築表現の可能性を追求する方法と様々な建築表現を試みる方法により、新たな建築技術や生産方法の実現を目指そうとする傾向を示すことができた。

以上のように、建築表現の関係性と建築表現の基となるモデルの想定の方とに基づいて考えられる、あらかじめモデルを想定し、同一の建築表現を反復し続ける画一的な思考や多様な建築表現を創

出し続けて汎用性を試す思考、および理想的なモデルを導出するために、同一の建築表現の可能性を追求し続ける思考や様々な建築表現を試しながら模索し続ける思考といった、継続的に建築表現を展開させる際の思考の形式は、建築家に内在するファクターに関する時間認識の枠組みの一端を示しているとも言える。このように既報とは異なる時間認識に関する枠組みの一端を捉えることもできた。

参考文献

- 1) 馬場璋造：生残る建築家像，建築情報システム研究所，1990.4
- 2) 大嶽陽徳，奥山信一：現代日本の建築家による増改築建築の設計論にみられる時間認識，日本建築学会計画系論文集，NO.709 pp591-599, 2015.3
- 3) 林俊博，末包伸吾，長谷川あみ湖，藤井一成：広瀬鎌二の鉄骨住宅作品「SH シリーズ」における空間構成と架構形式に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，pp.901-904, 20
- 4) 内山崇，山名善之，谷川大輔：前川國男設計のプレモスの部材構成に着目した開発過程に関する考察，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.313-314, 2008
- 5) 朽木順綱：アルド・ファン・アイクの建築思想-図式「オッテルロー・サークル」の変容について，日本建築学会近畿支部研究報告集，pp893-896, 2005
- 6) 林直樹，土居義岳：篠原一男の「亀裂」-その時代を語るキーワードとして，日本建築学会九州支部研究報告集，pp.785-788, 2007
- 7) 川喜田二郎：発想法，中央公論社，1967
- 8) 安藤一将，塩崎太伸，奥山信一，稲用隆一：建築家の連作における設計主題-現代日本の建築家の連作に関する研究，1，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.799-800, 2009
- 9) 安藤一将，奥山信一，塩崎太伸，稲用隆一：建築家の連作における設計論の展開にみられる形式-現代日本の建築家の連作に関する研究，2，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.801-802, 2009

注

- 注 1) ここでは、主に建築作品あるいは建築論をジャーナリズムに発表することによって、創作活動の表出としている建築の設計者をさして建築家とよんでいる。
- 注 2) 本研究では設計論を、設計者が実際に建物を設計するときの思考過程、関心事、具体化の方法などを著したものと定義する。
- 注 3) 広辞苑（第四版，岩波書店，1995 年）においては、「文芸・美術などで、同一のモチーフやテーマを追求して一連の作品を作ること。また、その作品。複数の作家でおこなうこともある」とある。本研究では、一人の建築家が同一のモチーフやテーマを追求して構想した一連の作品といった意味で用いている。
- 注 4) 参考文献 1)
- 注 5) 連作に関する設計論についての著書、論文は膨大に存在するため、すべてを把握することはできないが、一般建築ジャーナリズムを現代の設計者のもっとも自由で活発な表現領域であるという前提のもとに、それらのなかで最も代表的と思われるもののひとつであり、しかも長期にわたって継続的に発行されている「新建築」誌、「新建築 住宅特集」誌に掲載された設計論で、巻頭論文的位置づけのものを対象とし、3つ以上の作品に通底した主題が明確に書かれているものを資料とした。また、日本において大きく社会構造が変革した第2次世界大戦以降（1945 年）から現在（2013 年）までを現代と設定し、資料の対象期間としている。この範囲において、164 作品を資料とした（別表）。
- 注 6) 参考文献 2)
- 注 7) 参考文献 3)
- 注 8) 参考文献 4)
- 注 9) 参考文献 5)
- 注 10) 参考文献 6)
- 注 11) 本論では下記のように括弧を使い分けている。

『 』：連作に関する設計論から読み取ることができる、一連の作品に共通した主題、連作を構成する作品群相互の建築表現に関する関係性、建築表現の基となるモデルの想定の方をそれぞれ、『連作の主題』、『建築表現の関係性』、『モデルの想定形式』と記す。

- 【 】:『連作の主題』の意味内容のカテゴリ
[]:『建築表現の関係性』のカテゴリ
《 》:『モデルの想定形式』のカテゴリ
():資料番号

注 12) KJ 法とは民族地理学分野で川喜田二郎によって考案されたものとして知られており、何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決方法のプロセスまでの一連の方法をいう。ここではそのなかで、ある問題をめぐって問題のあり得る情報を集め、定性的データとし、意味の分かるような全体像とするまでのプロセスを狭義での KJ 法としている(参考文献 7)。ここでは、こうした意味で KJ 法的としている。本研究のように、多様な建築家の言説に対する分析方法として KJ 法を利用した研究は多く、こうした言語分析のプロセスはオーソライズされた方法論のひとつであると言える。

注 13) 資料とした設計論からは、連作をどの程度の期間をかけて構想したか(以下、構想期間)を読み取ることができる場合がある(124/164 資料、各資料の構想期間に関する情報は別表に示してある)。こうした構想期間は、連作における時間認識を検討するひとつの指標として重要で

あると考えられることから、『連作の主題』ごとに構想期間との対応関係を、構想期間の平均年数(約 6.1 年)に着目して、それより短いものと長いもの(全資料における該当数の割合は 64%:36%)に大別して検討すると、【形態】では 81%:19%、【空間】では 57%:43%、【構成】では 52%:48%、【構法・技術】では 66%:34%であった(百分率は少数第 1 位を四捨五入して示している)。これより、【形態】において平均年数よりも短いものが比較的多く、短い期間で完結する傾向があることが分かった。

注 14) 各資料における、表 1、図 3、図 4 のカテゴリ項目の情報は別表に記してある。

注 15) 【周辺環境との関係】に該当する資料が少ないため、3 章以降の分析からは除いている。

注 16) 資料のなかには、僅かではあるが、建築表現に関する具体的な記述のないものがみられた(12 資料)。こうした資料は、図 5 と図 6 において除いて検討している。

注 17) 注 13 で述べた構想期間に関する傾向も加味すると、これは比較的時間での思考と考えられる。

別表 資料表

資料番号	掲載誌	論文タイトル	執筆者	連作名	構成作品の数	連作の主題				想定形式
						形態	空間	構成	技術	
1	5003	PREMOS No72 に就いて	田中誠	プレモス 72 型	4	4			n	類
2	5407	木造住宅における CASE STUDY	池田誠	木造住宅における CASE STUDY	8	3				類
3	5411	住居デザインにおけるコアの意義	池田誠	住宅 No. - サービス - コア	4	1			h	類
4	5511	17 階における可能性の追求	池田誠	住宅 No. - プラン	3	1	c			類
5	5511	鉄骨住宅への反省	池田誠	SH - 構法	10	3			m	混
6	5511	鉄骨構造による 4 つの住宅	三輪正弘	鉄骨構造による住宅	4	-	b			差
7	k5804	工業化のためのデザインへ	池田誠	住宅 No. - 工業化	6	1			n	類
8	5806	都庁舎の経緯	丹下健三	シティー - ホール	5	6		g		類
9	6004	C.S. ハウス #3 の設計	増沢武男	コアシステム	3	3				類
10	6006	住宅における basic なもの、	池田博司	basic house	6	-			n	類
11	k6012	発想から形になるまで・・・	池田誠	SH - MC	4	2			n	差
12	6205	H 形鋼使用による住宅設計ノート	小沢行二	H 形鋼使用による住宅	3	-			i	類
13	6211	建築生産プロセス自動化への提案	池田誠	SH - 自動設計法	3	-			n	類
14	6210	綾河銀行支店建築の「かた」設計	池田誠	綾河銀行	3	-			h	類
15	7110	建築としての住宅	坂本一成	閉じた箱	4	-			e	類
16	7201	空間場としての住宅	中島龍雄	空間場	3	-			j	類
17	7202	住宅論	篠原一男	亀裂の空間	4	2	a			差
18	7204	(手法) について	磯崎新	手法	10	13	b			類
19	7204	コミュニティ・バンクの機能と空間	菊川清訓	アンプレラ・ストラクチャー	4	1			y	類
20	7205	若しの新しいコミュニケーション空間	小川淳	ユースハウス	3	3		d		混
21	7307	なし	伊丹淳	WORK	3	1			d	差
22	t7312	仮面としての建築	相模武文	自立した立面	3	2	a			差
23	7501	現代のファンクショナル・トラディションを求めて	野見山邦英	KAJIMA SCIENTIFIC BUILDING DESIGN SYSTEM	3	-			h	差
24	k7505	内なる空間Ⅲ/家次・住宅に関するノート	富永謙	内なる空間	3	2	e			差
25	k7601	なぜ連階段か	富永謙	連階段の家	4	10			h	差
26	7701	「帯」としてのオフィス・スペース	林昌三	帯	4	-			c	差
27	7702	住居と	宮城英雄	白い吹抜のある閉じた空間	4	-			e	差
28	7702	状況と模倣	松田忠雄	信念の基本空間	4	-			d	類
29	7703	沈黙と饒舌のあいだで	相田武文	鏡の造形	3	4	a			類
30	7705	余白の導入	長部裕	余白	4	11			k	類
31	7708	細胞としての住宅	山下公	細胞	6	8			d	類
32	7806	都市への埋め込み作業	長川逸子	津渕の建築	3	6	a			類
33	7902	家形を思い、求めて	坂本一成	家形	3	3	a			差
34	7905	中間階または階縁性へ	中岡誠	中間階	3	3			g	類
35	7908	再生への挑戦	星野厚雄	中古木村	5	7			l	類
36	7909	設計について	谷口吉生	二律背反の単純図形の組合せ	6	5	b			類
37	7909	狭間からの象徴空間へ	神谷五男	メタモル	4	5	a			差
38	7910	非矩形が変換する可能性を開始する	長川逸子	曖昧な図形	3	4	c			混
39	8004	地形の発掘・部屋の格納	香山壽夫	沖繩の住宅+病院	3	7			h	差
40	8008	鏡・コートハウスの記	太田隆雄	正面のなかへ	4	20			k	差
41	8008	表現について	他	アットとフォルム・メーション	4	7	b			差
42	k8008	多層屋根のコンセプト	木村誠二	木村誠二の博物館	5	1			f	混
43	8101	開かれた博物館をめざして	戸尾任宏	助物館	5	-			i	差
44	8102	プライマリの継承としての混構造	宮城英雄	混構造	5	-			i	差
45	8104	光と	栗林祥	光と梁構	3	9			m	差
46	8108	自然との共存を求めて	井村修	目神の家の	7	5			-	差
47	8108	形態とつき間	スプリット	スプリット	6	3			c	類
48	8209	設計思想	神谷五男	曲線	3	3	c			差
49	8304	なし	岸原義信	スプリット・レベル	3	-			h	差
50	8356	遊戯性、積木、そして……	相田武文	積木の家	10	7	a			差
51	8506	コミュニティ施設を木造でつくる	納田義典	豊里町の木造建築	5	-			l	差
52	8610	なし	山崎武志	コルゲートパイプ	5	-			l	差
53	8611	なし	長谷川逸子	パナシメタルのスクリーン	3	-			b	混
54	8703	3 つの図書館と幾何学	岡田新	幾何図形平面の図書館	3	-			b	混
55	8703	なし	大杉喜彦	INDEX	5	-			j	差
56	8704	54 の柱	山崎武志	54	3	12			j	差
57	8705	コンクリート・ブロック造の住宅 3 題	岡田新	コンクリート・ブロック造の住宅	9	13			j	差
58	8808	設計作業日誌 77/88	山本理顕	ループ	3	2			h	類
59	8810	INTERIOR LANDSCAPE	安藤忠雄	都市のアルコーブ	3	-			e	差
60	8901	「街の眼」から住宅を見る	早川邦彦	INTERIOR LANDSCAPE	3	-			j	差
61	8904	遅さの、沈黙の戦術を置くこと	鈴木了二	成城の家	3	9			j	差
62	8908	街路に開かれた集合住宅	早川邦彦	物質質行	26	16			i	差
63	8912	装飾の断面	久保清一	集合住宅	3	4			e	差
64	9001	場の意味と軸の規定	村上素子	装冠の建築	10	-			a	差
65	9002	自然・素材・建築	村原義二	自然との融合	3	-				差
66	9003	光のワイドレシーヴァー	原広司	光のシーヴァー	5	-			f	差
67	9007	フラットホーム	妹島和世	PLATFORM	3	2			d	差
68	9011	宙吊りの幾何学	宮崎好彰	ジャクションと接合	3	3	b			混
69	9011	木洩れ日のなかで	相田武文	ゆらぎ	6	3			i	混
70	9103	嫁の家に住む小児科医	栗林祥	緊張構造	3	2			m	差
71	9104	象徴化する	中村弘道	都市のシンボル	3	2			a	差
72	9106	紙の建築	紙哲	紙哲	3	3			j	差
73	9109	「ON AXIS-OFF AXIS」から「原案なる建造」へ	小林弘一	散策する建造	6	9			j	類
74	9109	好木心	中東義典	葺	7	15			j	差
75	9111	「地籍」の「かた」	林雅子	木造り	3	-			c	差
76	9112	「自往する秩序」と「争んだ空間」の合成	塚本由紀	未広がりによる西欧的造形	3	12	a			類
77	9201	建築の素形	内藤廣	素形	7	6	a			差
78	9203	建築の音響と体験	竹山聖	窓とコブによる空間構成	6	5			g	差
79	9205	都市空間のプログラム	山崎武志	MIZOE	3	4			j	混
80	9205	PROJECT MIZOE-3	藤井博己	MIZOE	5	25			g	混
81	9206	時と風景	横文彦	ヒルサイドテラス	6	8			d	差
82	9211	廻遊式住居	吉原義雄	廻遊式住居	6	8			d	差
83	9212	軸	池田誠	軸線	4	-			d	類

資料番号	掲載誌	論文タイトル	執筆者	連作名	構成作品の数	連作の主題				想定形式
						形態	空間	構成	技法・技術	
85	9302	都市小規模ビルの可能性	アキハタアイ	HATHAUS	4	5	d	e	類	
86	9304	構造テーマの継続と展開	坂城	南北面から前面開口で内外部が融合した空間	4	2	e		類	
87	9308	図式の体験	妹島和世	図式	3	2	b		差	
88	9405	【Barn】について	吉本剛	Barn	3	4		m	類	
89	9501	都市の単位	山本理顕	緑園都市	8	3	-	-	類	
90	9502	新しい住居形式を求めて	福村俊治	パティオをもつ住宅	6	10	e		混	
91	9505	津和野・安曇奥線	太田隆雄	KES 構法	3	4		o	類	
92	9506	浮遊する断片がダンスを始めた	竹山聖	天と地の対位法	3	6			類	
93	9507	伊東豊雄	八代の公共施設	動線体	3	7	ag		差	
94	9509	道から進化する建築	青木淳	動線体	4	-			差	
95	9510	明確なカタチをもった部分と何でもない段	奥山信一	明確なカタチをもった部分と何でもない段	3	2	h		差	
96	9512	トータルシステムとしての独身寮	岡本宏	PLUST-21	3	6			類	
97	9602	インターネット空間の断片	西宮善幸	internet 空間	3	-		k	類	
98	9604	原初の箱	葛西潔	木箱	3	3		d	差	
99	9605	光の建築	葉村栄	光の建築	6	16			差	
100	9608	海のシルクロード建築構想	高橋正治	地球建築	3	-			差	
101	9608	複雑性の海に浮かぶ装置体	早川邦彦	装置体	3	-	a		混	
102	9608	場所についての覚書き	塩田能也	つなぐ場所	3	1			混	
103	9609	未知の近代建築に向けて IV	岡河貴	ドミノ	3	3		i	混	
104	9610	部分野合としての建築	渡辺豊和	商業建築	3	10	a		差	
105	9611	第三の地形	谷口吉生	谷口吉生	4	-	e		差	
106	9611	第三の地形	園崎修	ランドスケープ	8	8	-		差	
107	9612	住宅のコストセービング	野沢誠	輸入材	4	-		n	類	
108	9707	原型としての「箱の家」	難波和彦	箱の家	8	12		n	差	
109	9707	丸太柱と鉄のビーム	石井和弘	丸太柱	6	14			差	
110	9710	鉄のこ	木村博昭	スチールシートの住宅	3	3		m	差	
111	9807	分有体への試み	遠藤亮平	コルゲート鋼板	6	4		差	混	
112	9808	森の中の憩いの場	香山壽夫	山荘	3	12	e		差	
113	9808	向隣住宅設計ノート	藤本忠善	家具の家	3	34			差	
114	9809	「家族の家の開発	坂城	坂城の家	3	4			類	
115	9902	同動	原広司	コロン	3	4		k	差	
116	9903	立方体住棟システムと「ARCHITECT」	原広司	立方体住棟システム	5	1			差	
117	9911	拡散し収束する家・5つのフェーズ	入江純一	拡散・収束する家	5	8	b	d	差	
118	0004	桐蔭学園キャンパス整備計画の歩み	桐蔭二部	コミュニケーションネットワーク	3	33			類	
119	0005	中 28 年	栗岡久	DOGU	8	10			混	
120	0009	建築のイメージから原寸まで	宮崎浩	透明性	3	2			差	
121	0011	なし	黒川昌男	丸太材構法	4	8		m	差	
122	0104	建築の4層構造	難波和彦	箱の家・サステイナブル	3	1			類	
123	0105	企業が掲げる時代のオフィスとは？	大江匡	オフィス	5	1			類	
124	0107	木箱が D121 による展開	葛西潔	木箱・鳥居形フレーム	6	5			類	
125	0109	グリッドプランはフレキシブルではない	山本理顕	グリッドプラン	4	3		i	差	
126	0202	部分から考えることの意味	坂本卓	連窓の家	3	-			差	
127	0205	都市空間を自由にレンタルするために	谷誠誠	空箱	3	4			差	
128	0211	中庭について	岸和郎	中庭	3	1	d	k	混	
129	0303	構成の強度／形式を純化すること	八重樫直人	フラットフレーム	4	3	c		混	
130	0303	共有するプロセス、事後的なプランニング	遠藤政博	チャール	4	2			差	
131	0310	版としての建築	坂城	シャッター	3	2		i	差	
132	0403	空間のこと	妹島和世	部屋の配列	4	-			差	
133	0405	複合の新しい（風景）を目指して	坂田善彦	対極的な形象化	4	7		j	差	
134	0406	パージョンプラザのリファイン建築	青木茂	リファイン建築	4	9		m	類	
135	0407	「絶対対位法」について	青木淳	ルイ・ヴィット	5	5	f		類	
136	0502	Renovation Style	納谷孝+新	マヨシンのリノベーション	6	3	e		差	
137	0505	共有するプロセス、事後的なプランニング	田辺芳生	空間の痕形	3	2			差	
138	0506	スペースブロックとダブルスキ	小島一浩	スペースブロック	3	8		h	類	
139	0508	建築は動かない	堀部安嗣	多角形平面をもつ住宅	5	3	c		差	
140	0509	パティオ・バルコニー・テラス	藤村俊治	パティオ・バルコニー・テラス	3	-	e		差	
141	0607	風景を支えるフレーム	下村英人	ダブルティル	3	-			差	
142	0608	建築その外にあるものと、今ここにあるもの	田井幹夫	ケール	5	5		j	差	
143	0609	新旧の対話する空間	安藤忠雄	新旧の対話する空間	3	6			差	
144	0610	CHINA RUSHING	渡邊一郎	スクーリング・ユニット	5	7		j	差	
145	0613	セミモノコック建築	オモミツコト	セミモノコック建築	3	1		m	類	
146	0703	図式の崩壊から	青木淳	ケールのオーバードライブ	4	11	f		差	
147	0704	ある暮らし方：でてきているメカニズム	中村龍治	JINS GLOBAL STANDARD	3	2			差	
148	0708	建築の物語	谷内田卓夫	高さのある建築ユニット	8	11		h	差	
149	0708	集合住宅であることと、その意義	谷内田卓夫	高さのある建築ユニット	8	11		h	差	
150	0710	住宅はアメーバ型ワンルーム空間へ	安田幸一	アメーバ型ワンルーム空間	4	3			差	
151	0710	刃折の街並みを考える	早稲津次郎	軽井沢の別荘	4	8	b		差	
152	0802	ワンルームといふ不動産タイプの再構築	田島則行	REISM	3	1		h	混	
153	0805	果たした、都市型住宅へ	岸和郎	中庭と上庭をもつ都市型住宅	7	12	e		混	
154	0807	ガラスの断片による「構造+機能+環境」	山下栄樹	ガラス・ブロック	3	4		m	差	
155	0805	ガラスの断片による「構造+機能+環境」	山下栄樹	ガラス・ブロック	3	4		m	差	
156	0911	改作：家型の意味を見直す	五十嵐浩	家型	6	7			差	
157	1007	ポトボーリー・センターとの7年間	坂茂	木造箱構造	7	12		m	類	
158	1102	「奥山信一」はなぜして「伊東」をやるか	塚本由晴	まち	3	2	-	-	類	
159	1105	線上的建築	佐藤光彦	一本の線	6	12	d		差	
160	1108	解け得て、高品質なプロトタイプ住宅をつくる	奥野公弘	7272	3	2			類	
161	1202	パティオ・バルコニー・シェーディング	辻原雄	パティオの流動	2	2			差	
162	1206	建築を語る	辻原雄	超現実的な可能性の場	3	9			差	
163	1211	建物からスペースへ、そして空間へ	菅原ノ	オフィススペース	5	9	d		類	
164	1303	建築の外へ入る場合の可能性から想起する	五十嵐浩	風浴室	3	1	e		類	

CONTINUOUS THOUGHTS OF ARCHITECTURAL EXPRESSION IN DESIGN THEORIES ON “A SERIES OF WORKS” BY CONTEMPORARY JAPANESE ARCHITECTS

*Akinori OTAKE**, *Kazumasa ANDO*** and *Shin-ichi OKUYAMA****

* Assist. Prof., Dept. of Architecture and Urban Design, Faculty of Regional Design, Utsunomiya Univ., Dr.Eng.

** NIHON SEKKEI, INC., M.Eng.

*** Prof., Dept. of Architecture and Building Engineering, School of Environment and Society, Tokyo Tech., Dr.Eng.

This study focuses on continuous thoughts of architectural expression in designing several architectures. These thoughts are one of the important methodology for executing works continuously. There are some theories in which architects and architectural critics referred to the importance of these thoughts. For examples, Shozo Baba, who is one of the authoritative editor in architectural journalism, insists that continuous thoughts of architectural expression is essential for architects to leave a mark on society through the long-term creative activity. From these points, this report aims to illustrate continuous thoughts of architectural expression by contemporary Japanese architects. In order to clarify it, design theories on a series of works by one architect on the same design theme are focused.

Firstly the contents of each design theory were analyzed, and several descriptions of the design theme common to a series of works were extracted (Fig.1). The meanings of these descriptions were classified into five categories, which were “theme on form”, “theme on space”, “theme on composition”, “theme on construction-technology”, and “theme on surrounding environment” (Table 1). Then most of the design theories contained “theme on form”, “theme on space”, “theme on composition”, and “theme on construction-technology”. On the other hand few design theories contained in “theme on surrounding environment”.

Secondly continuous thoughts of architectural expression were analyzed from a viewpoint of two aspects ; one is the relationship among each work’s architectural expression, the other is the way of setting the prototype model of the architectural expression in the process of executing works. The former aspect was classified into three categories, which were “similar”, “different”, and “mixed” (Fig.2,3). The later aspect was classified into two categories, which were “deductive way” and “inductive way” (Fig.4). Then, through analyzing the relationship with both two aspects, following characteristic combinations of both two aspects were found ; firstly “deductive way” and “different”, secondly “inductive way” and “similar”, lastly “inductive way” and “different” (Fig.5).

Consequently, the relationship between the meanings of design theme and the contents of above two aspects was considered and analyzed totally (Fig.6). As a result, in each design theme, there are several tendencies on above two aspects were founded. Firstly in “theme on form”, “different” was found largely, regardless of the way of setting the prototype model. Secondly in “theme on space”, four combinations were found ; “deductive way” and “similar”, “deductive way” and “different”, “inductive way” and “similar”, “inductive way” and “mixed”. Thirdly in “theme on composition”, a characteristic combination was found ; “deductive way” and “different”. Lastly in “theme on construction-technology”, two characteristic combinations were found ; “inductive way” and “similar”, “inductive way” and “different”.

(2015年9月4日原稿受理, 2016年1月13日採用決定)